



円借款事業で建設中のインドの浄水場を視察する橋本さん(右から3人目)

日本の経験を生かして 開発途上国に安全な水を届けたい

学生時代から開発途上国の人々の生活改善に貢献したいと思いつづけてきた橋本大樹さん。上水道分野の日本の知見と途上国の課題をつなぎながら、世界に安全な水を届けるため、日々奮闘している。

上水道支援で目指す より良い生活

私は幼いころ、父の仕事の関係でタイや中国に住んでいました。北京では外国人居住地区に住んでいたこともあり、子どもにも、現地の人々と自分たちの生活水準の違いを感じたことを覚えています。そのような経験が、途上国に関心を持つきっかけになったのだと思います。

仕事を通じて途上国の人々の生活改善に貢献したいという気持ちから、大学卒業後はJICAに就職。入社後のOJTでは、3カ月間スリランカに派遣され、内戦の傷跡が残る地域で、コミュニティー開発のプロジェクトに関わりました。そこで目にしたのは、女性グループのマイクロファイナンス活動です。内戦で夫を失うなど困難な境遇に置かれ、村から孤立しかけていた人々を取り込み、活動を行う女性たち互いに助け合いながらコミュニティーとして再び結束を高めようとする姿を通して、現場に寄り添い、持続的で効果の高い支援の展開を第一に考えるJICAの仕事の本質を学びました。

その後、南アジア部への本配属を経て、現在は地球環境部で上水道を中心とする水資源分野の技術協力と無償資金協力の事業形成や実施管理を担当しています。配属当初は担当分野の知識が不足していた、

部内の会議や相手国との交渉に付いていけず、この仕事が終わるか不安でした。幸い、JICAには勉強会をはじめ、組織内で業務上必要な知識を共有する仕組みがたくさんあったので、それらを活用して積極的に勉強しています。

複数の地域を担当して実感するのは、同じ分野でも、地域によって課題は千差万別だということです。例えば、アジアでは、水需要に対して施設や資金の投入、維持管理能力が追いつかないことなどが原因で、給水時間や水質の問題が頻繁に起きています。一方、島しょ国の多い大洋州では、国土が広い地域に散らばっているため、優先的な課題になるのは、水道事業の効率的な運営や公平性などです。

担当国に行くこと、自国の水道を改善しようという強い信念を持った支援先機関の幹部や、現場で地道に汗を流す技術者と会う機会があります。彼らと触れ合うたびに、JICAとして期待に応えなければと、身の引き締まる思いがします。

日本の経験とノウハウが 協力の鍵

上水道の担当になって以来、日本の経験や知恵に目を向ける機会が多くなりました。なぜなら、途上国では、安全な水を安定的に供給するという日本の水道事業のノウハウが強く求められているからです。業



地球環境部
水資源・防災グループ
水資源第一チーム

橋本 大樹
HASHIMOTO Hiroki

大学卒業後、2012年にJICA就職。南アジア部で電力・情報通信分野の支援方針の検討や円借款の案件形成などを担当。2014年5月より現職。



上水道に関する新規プロジェクトの立ち上げに向け、インドの関係者と協議を行った

務を通じて、日本のリソースを活用しながら途上国の人々の生活向上に役立てることにやりがいを感じています。

途上国の課題と日本の経験や教訓をいかに結び付けるかは、JICAの知恵の出どころでもあります。相手国と一緒に課題に向き合い、その解決に役立つ日本の知見を提供できるソリューションプロバイダーとして、信頼される人間になることが今の目標です。相手国の支援先機関や住民たちにも、自分たちのプロジェクトとして、取り組みに誇りと自信を持ってもらうことが大切だと考えています。そのためのお手伝いができるよう、これからも努力を続けたいと思います。